食料・農業・農村

破局の時代、再生、そして未来創造へ

農と食＝社会の根底から日本近現代をたどる五つの全集

日本の近現代百三十有余年の来し方行く末を考えるのに最適の全集群が㈳農山漁村文化協会から出版されている。「明治大正農政経済名著集」に始まり「全集世界の食料　世界の農村」に至る後掲五つの全集だ。

トップバッターの「明治大正農政経済名著集」が刊行され始めた一九七五年、時代は大きな世界史的転換点に立っていた。その幕開けは、①71年のドルショックと72年のニクソン訪中であり、②73年の第一次石油ショックと翌74年ローマで開かれた世界食料会議である。

①はドル一極支配体制の終焉であり、かつ第三世界の雄・中国をヌキにしては国際政治を語れなくなったという二重の意味で、戦後の米ソ二大国体制から多元的中心の国際社会へ世界が移行する端緒であった。②は大量生産・大量消費・大量廃棄の文明に警鐘を鳴らし、人類史の課題が階級対立の解消から自然と人間の敵対関係の克服を主要な課題とする時代へ移行したことを示すものであった。

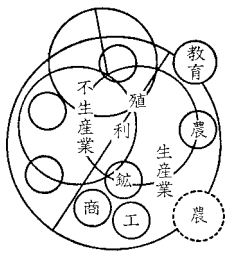
〈多元的中心の国際社会〉と〈自然と人間の調和〉をめざす二つの新たな課題を展望するとき、農のもつ意義は明確だ。農の世界は、それぞれの国・地域の風土に立脚せずしては成り立たないが故に覇権的競争や修復不能な環境破壊になじまず、かえってそれを牽制し、人間を絶えず調和に向かわせる本質的契機を内包しているからだ。商工業との本質的違いである。

明治以降、わが国農業の地盤沈下は著しい。こんにち、国内総生産に占める農業の比はわずか1・4％、その生産に携わる人の数は全就業人口の4・7％にすぎない。4・7％の人口で1・4％の付加価値しか生産できていないことに非難の声が絶えないこともまた一方の事実ではある。にもかかわらずこの五つの全集は、農業の価値をGDPに象徴される抽象化された擬制的価値の観点からのみ裁断することの浅薄さを衝き、こんにち二つの人類史的課題に農の世界が果たす根本的な意味を明らかにしてきた。

農を通じて創造されたわが国社会科学の原点

「明治大正農政経済名著集」

日本の近代は農村を「踏み台」にしてスタートした。殖産興業と富国強兵を二大柱とする急速な近代化を、国内的諸条件が未成熟なまま進めざるを得なかった明治の新政権は、その財政的基礎を地租改正に求めた。その歳入全体に占める比はじつに80％。しかもこの改正地租は、土地収益を資本還元した地価を基準に定めるというのはタテマエで、ホンネは「旧来ノ歳入ヲ減セサルヲ目的トシ」というものであり、かつまた地価算定検査例第二則において68％もの高率小作料を「適実」なものと設定したことなどによって、農民の土地所有権を法的・形式的には確認しつつその実質は広範な農民層の没落を促し、地主・小作関係の強化＝地主制の創出に道を開いたものだった。かくしてその後、明治一〇年代後半の松方デフレを経て農村経済の疲弊はさらに進み、明治後半から大正期にかけて〝先進国〟には例を見ない（寄生）地主制が確立することとなった。



「明治大正農政経済名著集」はこのような時期に書かれたわが国社会科学の原点である。農村の疲弊を憂うヒューマニズムを出発点としながら、農業・農村が商工業の隆盛と対極の窮地におかれることの国民経済的弊害を説き、その克服の途を科学的に明らかにしようとした。もとより当時の社会科学は「創生期」であり「原点」である。その理論的水準は必ずしも高いものではなかった。にもかかわらず我々はたとえば次のような記述をこの名著集の一冊に見出すとき、こんにちなお深めるべき優れた視点や方法が先駆的に提起されていることに気付くのである。

「余嘗て農学の性質の医学に相類似することを察（み）て……其れ農医の二科は共に人体に直接の作用を為すものにて、一は健康の維持に係り一は健康の回復を旨とするものなり、即ち食を供するは……其本分の斯の如く人類の生命に関するが故に、この二学術は何れも皆材料を広き範囲に収集せざるべからず」（新渡戸稲造『農業本論』本名著集第七巻）。新渡戸はまた、上の図に示したように農業と教育を同一線上に配置し、その性質を「利殖を旨とする」他の諸産業から区別して考察すべきことを強調した。医、食、農、教育は直接「人類の生命に関するが故に」、市場原理のごとき狭い視野から解放し「広き範囲に」考察の材料を収集してその「本分」を究めねばならぬ。かくして新渡戸の「農を軽視して商工の発達なし。商工のみの発達はいわゆる帝国主義の弱肉強食となる」という本書の結論は、農学出身の身贔屓によるものではむろんなく、広く諸学問、諸産業を見渡した上での総合的な知見と見識から導き出されたものだったのである。専門分化し総合性を失った現代の学問が社会のトータルな課題に適切に応える能力を喪失したかに見えるこんにち、むしろ創生期の学問のほうに現状克服の優れた方法的原理を見出すことができるように思われる。

日本の破局と新しい芽を正確に見定める

「昭和前期農政経済名著集」

時代は下って昭和前期（1926～45）。恐慌に始まり敗戦で終わったこの暗い時期は、一方でわが国社会科学が激しい思想弾圧にも屈せず日本社会の科学的分析を一歩も二歩も前進させた光輝ある時代でもあった。数々の名著を生み出し、戦後の民主化を学問的に準備した思想的・理論的格闘の中心軸は、やはり農業問題であった。

収穫の半ばにも達する高率の小作料は、農業の発展を妨げ、農民の生活を苦しくしていた根本原因だったことは言うまでもない。のみならずそれは農村から供給される都市労働者の低賃金をも規定することとなった。農民と労働者の貧しさは日本資本主義の国内市場を著しく狭いものにし、勢い、その活路を外国市場に求めることとなり、ついには軍事力をバックにアジア諸国への侵略をくり返す野蛮な性格を日本資本主義に与えることとなった。かくして農業・農村問題は農業・農村を越えて日本社会の基本問題となり、全知識人共通の関心事となっていた。

「昭和前期農政経済名著集」にはそのような日本資本主義とその基底をなした地主制の基本性格をめぐる研究を始め、農業生産費論、農家負債・金融論、産業組合論等、戦後農政の三大柱（農地法、食管法、農協法）に連なる優れた名著が収められている。

これらを含め、分析され論じられているのは制度、政策論ばかりではない。地主制の枠の中でも自小作農民の営農にどのような新しい芽が生えつつあったのか、生産力論的角度からの分析も数多くなされている。このことは明治の開国以来、日本農業は国際社会の中でどう生きてきたのか、どう生きてゆかねばならないのか、後・中進国の追い上げに負けないような技術・知識集約型の農業をいかにつくり出すかという課題に正面から取り組んでいたことを示している。アメリカのみならず中国を始めとするアジア諸国との競合も増しつつある今、学ぶべき問題意識と言えよう。暗黒の時代に、明日の光明を信じて仕事をした人びとがあったのである。

戦後から現代へ、農業・農村の新しい意味を提起する3つの全集

戦後の日本農業は地主制のくびきから解放された。自作農となった日本の農家がもてる力を遺憾なく発揮したことは、農地法制定後わずか10数年にして米の自給を達成したことに如実に現われている。しかし他方で農村は、戦後まもなく始まった高度経済成長のための土地、水、労働力の供給源となり、それは農産物輸入の増大によりさらに拍車をかけられた。こうした戦後の息吹と、都市・工業と外国農産物との二重のあつれきの中で生じてくる新たな問題を多角的、重層的に見られるよう編集されたのが**「昭和後期農業問題論集」**である。二つの「外圧」の中で、何を農村は培い次の時代につなげたか、収録された論文以外の膨大な関連文献・年表ともども、生きた戦後農業誌を肌で感じられる全集となっている。

つづく**「食糧・農業問題全集」**はプラザ合意の翌86年から刊行された。時代はバブル経済に突き進み、急激な円高による内外価格差の拡大、土地の高騰等を理由に声高な農業・農協バッシングがくり返された時期だった。この全集は『**明日の農協**』『**農産物の価格と政策**』『**工業化社会の農地問題**』等、すぐれた理論的著作によりその誤りをただし、こんにちに連なる覇権主義的グローバリズム批判、市場原理至上主義批判の先鞭をつけた。それはまた、「明治大正」「昭和前期」社会〉や〈自然と人間の調和〉は、二度にわたる世界大戦を惹起したようなブロックイズムに戻ることではない。技術、資源、文化、制度など、何が非代替的で何は交流、交換が可能なのか。棲み分けと相互浸透の了解が必要なのだ。**「全集世界の食料　世界の農村」**はそのような問題意識のもと「世界とアジアからの受信、日本からの発信」をコンセプトに編まれた。それぞれの国・地域の食と農業が学び合い、足らざるは補い合って自分の風土に馴染ませていく。第一巻『**海外農村視察必携**』を筆頭にした27巻のラインナップは、地域主義に基づくグローバリズムと世界を取り入れた地域主義が食と農の世界で可能であることを示している。自然と人間の調和に資する多元的中心の国際社会形成の途は食と農から始まる。

明治大正農政経済名著集
全24巻　〈編集〉近藤康男、阪本楠彦、村上保男、梶井功、A5判、上製、箱入、各3000円～5000円、揃価91500円〈主な収録書〉川上肇『日本尊農論』、柳田國男『時代ト農政』、新渡戸稲造『農業本論』

昭和前期農政経済名著集
全22巻　〈編集〉近藤康男、阪本楠彦、村上保男、梶井功、A5判、上製、箱入、各3600円～8000円、揃価113000円〈主な収録書〉近藤康男『農業経済論』、東畑精一『日本農業の展開過程』、平野義太郎『農業問題と土地変革』

昭和後期農業問題論集
全24巻　〈責任編集〉近藤康男、A5判、上製、箱入、各3400円～4800円、揃価94600円／戦後に書かれた農業問題に関する優れた論文を、「農地改革論」「土地制度論」「農産物市場論」「農業経営理論」などテーマ別に選んで収録。

食糧・農業問題全集
全20巻・22分冊　〈編集委員〉今村奈良臣、犬塚昭治、河相一成、七戸長生、陣内義人、永田恵十郎、松浦利明、吉田忠、A5判、上製、各3200円、揃価70400円

全集　世界の食料　世界の農村
全27巻　〈企画委員〉今村奈良臣、犬塚昭治、七戸長生、永田恵十郎、中安定子、原田津、吉田忠、A5判、上製、各3200円、揃価86400円

●関連全集

小倉武一著作集
全14巻　WTO・新食糧法施行の大変革期に戦後農政の当事者として農政を総括。世界の政治と農業と人と環境を論じ、農民の社会的存在に迫った論評と提言は、21世紀の農業の価値実現と農政理念の確立にとって基本文献。A5判、上製、箱入、各4500円

地域農業活力図鑑
全10巻・別巻1　全国の各市町村の経済活力と農業活力を17の指数で共通指標化し10年間の動向を分析。市町村の個性を把握し、人と資源を活かす地域づくりに必備資料。㈶農林水産長期金融協会編、A4判、上製、揃価100000円

近藤康男著作集
全13巻・別巻1　マルクス経済学の立場で独自の追求により農業問題を社会科学にまで高めた近藤博士の著作集。自ら撰しテーマ別、年代順に編成。巻頭に自ら改題の筆をとり時代背景を解き問題意識を語る。A5判、上製、箱入、各4500円、別巻5000円
〈主な収録巻〉2農業経済論　4日本農業経済論　6農業経済調査論　7農村民主化の課題　8農地改革の諸問題　11日本漁業経済論　12高度経済成長と農業問題